



信州・松本・中町のこと

中嶋 節雄



毛沢東の死、北京政変と相次ぐ中国情勢の激動のためもあって、この秋は例年のように信州の自然を満喫する時間がほとんどなかった。

そのようなあわたたしきのなかで、去る二月上旬のある日、信濃毎日新聞のセミナーに招かれて講演旅行に出かけたときの千曲川畔の秋色はひとときわ鮮やかだった。やはり信州はいい、といつもながらに思う。

この時の講演旅行には、前OECD大使で現外務審議官の吉野文六氏と御一緒だった。吉野さんは、私の郷里・松本の先輩であるが、それも市内を流れる女鳥羽川に沿った中町という同じ町内の御出身で、御父君は弁護士であった。私は幼い頃、ここが吉野弁護士の家だと母に教えられた記憶がある。吉野さんは、この講演旅行のあとヨーロッパへ出張され、紙上で報せられたように、ECの対日経済問題で重責を果たされていたが、外務省の懇談会などで最近はしばしばお目にかかる機会があり、日頃、そのお人柄には、私の亡き義父に似た風貌とともに親しみを感じていたので、上山田の湯につかりながら一夜の歓談にふけたのであった。

私の生まれた中町は、城下町・松本の商人町で、いまは問屋街のようになっているが、古くは松本のもっとも繁華な町の一つであった。ところが、どういふ偶然からか、この中町からは、さして大きな町内でもないので、外交とか国際問題とかにかかわりのある人物が何人も出ているのである。吉野さんの家は、一丁目と二丁目の境にあったが、父が薬局

を営んでいた私の家の二軒おいて右隣の老舗（蒲田店）の御子息が「松岡洋右」（中公新書）を著した上智大学の三輪公忠教授である。三輪教授のことを私は「キミタダさん」と呼んでいたが、幼稚園の頃、キャラメルを買ってくれたこの「お兄さん」には三年程前に三〇年ぶりに再会して以来、しばしばお会いする機会がある。

その三輪さんと私の家のあいだに女鳥羽川に沿って吉沢先生という歯医者さんがあったが、この吉沢先生の御親戚が松本市出身の吉沢清次郎元駐インド大使であった。吉沢大使は現在、八〇歳を超えてなお御健在だとのことである。

私の家の左隣の方の四軒目は古くからの金物店であったが、その二男がある国際会議に御一緒したこともある国際経済学者の坂田善三郎・独協大学教授であることを知ったのは松本幼稚園（園長先生は郷土史学者として知られる一志茂樹氏であった）から深志高校（この秋、創立百周年を迎えた）まで私と一緒にだった旧友（教授の甥を通じてであった）。

いずれも松本市中町出身であり、いまでは「ノンノン」族、「アンアン」族の若い女性に人気のある信州の城下町の中心部に北アルプスの銀嶺を望みながら育ったのである。いつの日か、これらの全員が一同に会する日があってもいいだろうと思っっているが、その時には最年少の私が幹事役を務めねばなるまい。

（東京外語大学助教授）

# 通信人

昭和52年1月号

題号揮毫 宇野雪村  
表紙「旭光舞鶴」 片桐白登  
カット 三上正寿 榎本昌子

悲喜こもこも

通信人の総選挙／星取り／小笠原龍三

今年の景気を占う方法 岸本重陳

「中道指向」の議会政治とは 田村祐造

## ついでに

縁 鈴木恭一 8  
「鶴の舞」 下重暁子 9  
信州・松本・中町のこと 中嶋嶺雄 10

## 通信人国記

電信電話に生きる (下)  
將軍石黒軍四郎技師

高橋善七 20

農業展望 「国防と食糧」 寺山義雄 26

特定局だより

東京の真ん中の特定局

越中富山の特定局

◇お伊勢さんのお正月 みうらいちむ 12

◇二〇名の通信人たち 上坂昭彦 11

郵政ひろば

電電さろん

一國一城あるじのことは 大和勇三 28

美術の泉 速水御舟の「牡丹花」 27

▼組合の窓 労働界の対立は激化か 30

編集後記 31

## 80年代への道標

第三四回総選挙は八〇年代への道標となりそうである。長期にわたり単独統治を持続してきた自民党と飛躍的に伸長していた共産党の大敗。公明、民社、新自由クラブの各党の躍進は、有権者が穏健な中道路線を志向していることを物語っている。

とくに自民党の歴史的敗北は、政局の激動を予想させ波紋を呼んでいる。しかし、冷静な目で政治構造を分析するならば、有権者内の保守層に大きな変動は見られない。新議席も「保守」という枠組で考えるならば、自民党、新自由、保守系無所属あわせ二八三程度になる。

保守層は、自民党が単独で過半数を維持することを拒否したのであり、この点から中道寄り政治の微調整を求めた、と受けとめるべきである。政権交代が基本である議会制民主主義の原理に基づけば、有権者は日本政治の民主化に極めて賢明な判断を下したのである。

だが「政治の民主化の側面からは前進であった総選挙結果も、安定した政治運営の観点からは不安がともなう。総選挙中、米ソは二〇〇カイリ水域設定で条約を調印、EC諸国は、一方的に対日輸入規制を突きつけてきた。石油ショック以

来、国際政治で胎動している資源ナショナリズム、保護貿易主義への傾向は、明らかに姿を現してきた。資源に乏しく、貿易に依存せねばならない日本に厳しい国際環境である。

穏健中道路線が有権者が選択した枠組でも、それが直ちに政局の安定に連なるものではない。党利党略本位の政党間の合従連衡が行われれば、多党乱立の政局不安定に落ちいらざるを得ないだろう。フランス型、イタリア型の政治に似かよふことになる。しかし、与、野党の勢力が伯仲しても、対立の幅をせばめ、歩みよれば政局は安定する。保守二党が手を組んだ西ドイツの「大連立」は、その典拠である。西ドイツがEC諸国で唯一、経済で安定し、フランス、イタリアが経済で混乱しているのはよく知られた事実である。

厳しい国際環境に立ち向かうのに国内政局の安定は欠かせない。他方、有権者が選択した政治の民主化は進めなければならぬ。この二つをどう結ぶかが、今後の日本の繁栄にかかわる。これまで、自民単独統治のもと、自民党のみならず、各野党も不毛な対立、抗争を続けてきた。政権獲得の現実性がないため、各野党存在誘示に争点をふくらませることに専念した。それに与党は安住し腐敗政治を生んだのである。一党統治が根底から動揺しているいまから、国民のための真の政党政治の季節が始まるのである。